修 士 論 文 要 旨

学籍番号 22GH105 第 号	氏 名 西野 亜唯
人文社会科学専攻（コース：文化芸術）	

論文題目

音楽を語る言葉の分析：てつがくオンガクかふぇの実践から

本論文は，市井の人々が音楽を語る言葉に焦点をあて，好きな音楽について紹介し合うワークショップ〈てつがくオンガクかふぇ〉を実施し，人が音楽を語る言葉は創造的であるのかを文献調査とアクション・リサーチを研究方法論として観察・分析し，明らかにすることを目的としている。

これまで，音楽を含むあらゆる事象を言葉で説明することは，西洋哲学や音楽美学などによって何度も試みられてきた。それに対しソンタグ（1996）は，芸術を言葉にすることについて，ラスコーやアルタミラの洞窟壁画を原初の芸術として挙げ，これは魔術や呪文のような体験であると指摘した。そして，その後にギリシアの哲学者達が提唱した模倣説を指し，これは言葉によって芸術を説明した最初の理論であるとも指摘した。そこから，芸術そのものである「形式」と，言葉による解釈である「内容」の二項対立が生まれたとソンタグは主張している。しかしその一方で池田晶子（2010）は，言葉が事象そのものへ限りなく近づく可能性について言及した。言葉に出来ない「未知のもの」に気づいた詩人は，言葉を失って沈黙すると池田は指摘する。そしてその「未知のもの」を見ている詩人の意識に，今度は膨大なヴィジョンが言葉としてやってくる。そこに詩人の意志は無く，言葉は意識そのもの，事象そのものになる。それが池田の言う「創造」である。更にソシュール（1972）は，文字，発声，頭の中にある音声などを聴覚映像，シニフィアンと呼び，それらによって意味されている概念をシニフィエと呼んだ。言葉とはシニフィアンとシニフィエの恣意的な結合体であり，記号であるとソシュールは主張する。頭の中の音声がシニフィアンであるなら，頭の中にある音楽も，これに含められるのではないか。だとすれば音楽と言葉は人の頭の中に共にあると仮定でき，それを言葉にしようとした時，池田の言う創造が起きるのではないかと考える。しかしながら，ソンタグと池田が言及した対象は，批評家と詩人にそれぞれ限定されている。このような背景から，本論文では以下のような research questions を導き出した。１）市井の人々はどのようにして音楽を語るのか。２）人が音楽を語る言葉は創造的であるのか。

人々が音楽を語る言葉を分析するために，フランスのパリでマルク・ソーテによって創られた〈哲学カフェ〉を参考にした，ワークショップ〈てつがくオンガクかふぇ〉を実施し，アクション・リサーチを行った。アクション・リサーチとは，調査者と対象者達が共同となって活動し，そのプロセスを通して新しい場を作り上げていく研究方法である。〈てつがくオンガクかふぇ〉では参加者達が好きな曲を持ち寄り，紹介し合う活動を行った。本論文ではこれまで２回企画・実施したこのワークショップから，「どのように音楽が語られたのか」「参加者達にとって話しやすい場だったのか」に注目して分析を行なった。１回目の findings は，１）参加者は曲の情報と感想について話す流れが多いこと；２）全員が調査者のフォローをしていたこと，である。２回目では，あえて発言を曲の感想のみに限定し，調査者から曲を紹介して参加者へ発言を求めた。findings は，１）感想だけでは発言の幅が狭まり，言葉が減ること；２）調査者によって押し付けられることは参加者の苦痛であること，も２点である。以上を踏まえ本論文は，１）市井の人々は自分の持っている知識や感想など様々な切り口を用いて音楽を語り，２）音楽を語るために制限無く現れる言葉は創造的である，と結論付けた。

今後の課題として，参加者達が音楽についてより気軽に語れる場を目指し，ワークショップの実施の仕方を改善していくことが挙げられる。